

た。後藤さんはなくなられたのである。

丁度、日本文学協会の大会を立命で引きうけていて忙しい最中であつた。大会の運営の準備や何やかやで森本君の責任は大変であつた。その中でもかまなく葬儀はどこおりになく執行され、茶毘にふされた御遺骨の前に坐つたときは、ほつとした思ひであつた。現職は皇学館大学であつたけれども、長い立命館大学との関係からして、私達としては、それに参加することは、何の躊躇いもなかつた。氏の学者としての生涯の大部分は立命館大学と共にあつた。葬儀にあつて厚い志をもつて何かと働いたのも立命の卒業生であり、教え子であつた。立命の日本文学専攻が今日のようなことになるには、後藤氏の力があつた。その寄与と功績とは長く記憶しなければならないだらう。

中世文学から近世文学へ研究の歩武を進められた氏の学問について語ることは、私の任ではない。沢山の業績が十二分にそれを語つてゐる。おそらく後生を啓発するに足る不滅のものがある。それは信じてよい。氏ほど醇乎たる学者的良心をもつて、時には論争も辞せぬ探求心によつて精進した学者は、そう多

くはない。一筋に学問に生きた方であつた

し、そういう情熱が学生を引きつけたのである。世俗のことに介意せぬことが学者の資格とは思わぬが、烈しい学問的追及の道途に、そういうことが雲煙漠々たる彼方にかすむことは当然ありうべきことであつたし、美しい生き方であつた。後藤さんを思うとそういう烈しい生き方が身近にあるという安心と憧憬を感じたものである。私はそういう意味で氏の死は何よりも無念であり残念であつた。しかし、それは現身にかかわらぬことであるとすれば、今後長く私自身の中に生き続ける後藤丹治像であらうか。

氏についての個人的な回想や挿話もいくつもあるけれども、何しろ二十年をこすほどの久しい期間としては淡々としたものであつた。そのことが改めていま想起される次第である。年齢の違いということよりも、もつと別の事情があつたようだ。それでも終始一貫して敬意をもちつづけえた先輩であつたことは、私の何よりの幸せであつた。静かな後藤さんの御冥福を祈る次第である。

(本学教授)

思　い　出

浅野達三

私が文学部ではじめての助手として、哲学の岸田君と共に研究室に勤めさせて戴く様になつたのは昭和二十三年、文学部長橋本先生、主任教授清水先生の時でしたが、直接の指導教授としては後藤先生を仰いでいました。当時の国文学研究室は中川会館の二階に国史と共同であり、教授会もこの室で開かれていたので会議の間は外をブラブラしていたものです。近松の演劇的な考察を目標していた私は、後藤先生から実証的で緻密な研究方法を教えられ乍らもそれに従わず、すすめられた近松用語の索引カードの作製も途中で投げ出してしまつた様な訳で、不甲斐ない男とお思ひだつたことと思ひます。

今の経営学部のところに木造の文学部学舎が建つた時の研究室の移転は大変でした。用務員氏のリヤカーの後押しをして河原町通の電車道を何回も往復したことでした。この頃は後藤先生が研究室の主任でしたが、どこに

いるか訳のわからぬ私に用務を命じられるのに、いちいち自分の名刺の裏に要件を書いておかれるといったことがあつて、これが何よりも恐縮の種であり、お叱りを受けるべき事許りで申訳ない次第でした。こんなちよつとした事にも先生の人が惚ばれ、世俗的な人間関係よりも研究一筋に打込まれた態度に感服します。助手の私の方がノサ張つている様な感じではなかつたかと今になつて恥かしく思い起します。

先生には学校でよりもお宅でお目にかかつた方が多いくらいでした。学生時分には同級の者は三・四名ですから講義はほとんどお宅でして戴きましたし、奥様の心づくしの色を色々戴き乍ら色々とりとめもないお話をした事も多い出多いものがあります。大阪の境跡で作つた野菜を喜んで貰つて戴けたのも何よりも嬉しく思つています。学問上の御恩はもとよりとして、こんなに色々な面で気安くお導き下さつた先生に長くお会いしないでいるうちに突然のお知らせで全く驚きました。

青年時代を立命館大学で過した私も、中年と言われる年になつてその頃のことをしみに

みとなつかしく思い出しています。反省すべき事のみ多い嘗ての日々の思い出ではありませんが、後藤先生の温顔とその独特の歩かれ方は今も目の前にありありと浮んで来ます。そして最近もつとしばしばお訪ねしてお教を受けておけば良かったと後悔の思いで一杯です。(昭和二十三年三月卒、大阪府立泉尾高等学校教諭)

後藤博士の御逝去を悼む

石 古 繁 信

後藤博士が突然、御逝去せられたことを、心より哀悼の意を表します。

博士の御指導を受けたのは、昭和二十四年から三十二年までの八年間である。学部二年間と大学院六年間である。

博士は温厚篤実なお人柄で、国文学の道ひとすじに生きてこられた方である。それは、数多くの論文は勿論のこと、博士の講義を一度でも受けた人は、誰でも感じることである。昭和二十七年、大学院文学研究科に日本文学専攻が設けられた時、私は第一に志望したのである。その頃、私は大阪府布施市の定

時制高校の国語教師として勤務していた。大学院の講義を受けるために、布施と京都の間を往復四時間のところを、ほとんど休まずに通い続けたのも、ひとつに博士のお人柄と、そこからにじみでる学問の深さにひかれるところがあつたからである。

私は近世文学——馬琴の読本の研究へと進んでいつたのも、博士の学問に啓発されたからである。大学院で講義せられたのは、「太平記」「平家物語」であつた。例の特徴のあるきちんとした文字をていねいに書いて、時間通り講義をして下さつたものである。

博士の学位を受けられた前後は、「読本の研究」に没頭していられたように拝察している。晩年はやはり上田秋成、典亭馬琴の読本にあつたようである。岩波書店から刊行された「椿説弓張月」(「日本古典文学大系」60昭和33年8月刊)は、お忙しい講義の傍、執筆していられたのである。私はわが身の浅学非才をかえりみず馬琴の大作、「南総里見八犬伝」の素材と構成という研究題目をきめたのもそのためである。それ以来六年間、教育事務のかたわら、年表の作成に、論文の構想にたびたび先生の御住居をおたずねしたもの